

Ⅲ-8. 後方支援活動

雑感（後方支援を通じて）

総務部総務課

石崎 兼司

3月11日（金）午後、東京でも大きな揺れに見まわされた。東京であれほどの揺れであったのだから、被災地での恐怖心は如何ほどであったろう。幸い東京では停電・断水等はなかったが、すぐに電話が不通となり、情報収集手段の脆弱性を思い知らされた。また、交通手段も不通となり私自身も「帰宅難民」となった。

翌日から徐々に通信・交通手段とも復旧し、附属施設の被害状況が詳らかになり、最も被害の大きかった豊洲病院も補修工事に目処がついた週明け月曜に、被災地への医療救援隊派遣の議論となった。この決断は、どの医療機関をみても、その規模から言っても、その早さから言っても特筆すべきものであった。

意志決定の早さはすさまじい。出発日は3月15日13時、行き先を岩手県宮古市付近と決定した後には、現地の情報収集を、岩手県在住の眼科学教室客員教授を通じて行い、第1陣の人選と必要物資の調達・緊急車両の届け出等を平行して行い、翌日には何もなかったかのように、人も物も全て整っていた。

第1陣以降の現地の状況については、各隊の報告をお読みいただければ垣間見ることが出来ると思われる。

では、後方支援では何が行われていたのか。

私が心がけたことは、最前線の医療活動が損なわれることがないように、所謂兵站任務を行う、ということである。最前線にいない私にとって、相対的には現地よりも暖かく、物資にも恵まれていた訳であるから、曜日を問わず活動していた現地と同じ生活を送ることは最低の義務であり、彼らが必要とすること理解し、必要なものをいかに円滑に届けるか、ということに腐心した。実際、物流が復旧するまでの間は、合計4回を陸路にて物資を補給し、内2回は私自身が現地へ赴いた。

現地とのコミュニケーションでは、派遣当初の情報伝達手段は衛星電話に限られており、わずか600

キロ先の岩手県に電話をするのに、あたかもニューヨークと電話をしているかのような時間差に苦労しつつ、情報を収集した。この限られた情報を、毎日行われていた打ち合わせに諮り、この「参謀本部」で決定されたことを具現化する、ということに終始した。

人選では、本学の医療救援隊はその全員が自ら救援活動を志願して結成されている、という点が特徴的であり、第2陣からは、全学内から救援隊参加者を募り、その中から必要な人員を選抜した。つまり、「誰かに行かされる」のではなく、「自ら行く」という能動的なものである、と言うことが特徴的であった。現地からの要望を加味した上での人選は、現実に即したものであることは勿論のこと、その内容として医師・歯科医師・看護師・薬剤師を始めとして、理学療法士や学生も動員し、急な派遣依頼であっても、誰しものが快諾され、その意識の高さにも脱帽の思いであった。

最後に、十分な物資補給が出来ない中、最善の医療行為を行っていた各隊に敬意を表したい。

また、質・量共に、チーム医療の特徴をいかに発揮した本学が、医系総合大学であることを再確認した1か月間であった。

「医系総合大学」だからできること

総務部総務課

出光 慎太郎

昭和大学でなければ、震災直後から約1か月の長期間に亘る救援活動は実現できなかった。なぜなら、それは昭和大学が医系総合大学であるからだ。たとえば、医療系ではない大学では、知恵や物資といった支援はできても、医療チームを派遣することは当然不可能であり、仮に、医療系の大学であったとしても、本学のように、医・歯・薬・保健医療の4学部があり、多くの附属病院を有し、なにより「至誠一貫」の精神が一人ひとりになれば不可能であったことを、この救援活動を通して感じた。

大阪出身の私は、阪神・淡路大震災時、隣県の神戸や淡路の被害を目の当たりにし、何か役に立ちた

いという気持ちはあったが、当時まだ小学生であったため、何ひとつ行動できなかった。しかし、今回は、自分が事務職の立場から、医療救援隊を微力ながら支援し、昭和大学の一員として、被災地復興に貢献できた。

私は、総務課員として医療救援隊の1陣から7陣までその後方支援を担当した。今回の震災に際して、昭和大学として被災地へ医療支援を行うことが決まり、1陣は車で岩手県に向かうこととなった。早急にワゴン車とバスの緊急車輛の手続きを行い、同時に薬品や物資の積み込みを行うなど各部署と連携し準備した。救援活動の拠点となった山田町に救援隊が入った当初のライフラインは壊滅状態で、一般電話はもちろん携帯電話も不通であったため、衛星電話が本部と唯一の連絡手段となった。しかし、衛星電話の音声はクリアではなく、バッテリーも短いため、短時間で現地の隊員の安否状況や食料等の要望を確認することは容易ではなかった。それでも現地のニーズに少しでも応えるべく、震災の影響で物資や食料などが手に入りにくい状況であったが、東京中の店舗をまわり、必死の思いで物資を確保した。

また医療救援隊本部では救援隊を支援するため、3月15日から4月16日まで土日問わずほぼ毎日定例の会議・打ち合わせが行われ、そこでの資料準備や現地活動報告にも携わった。また救援隊の活躍や現地の状況を本学ホームページで紹介し、ほぼ毎日更新を行った。ホームページの反響は大きく、マスコミからも問い合わせがあり、社会的な関心の高さを実感した。

現地までの移動時間と疲労度を減らすため、2陣からは現地までの移動手段を飛行機とし、その手配を自分が担当した。羽田空港の集合場所や航空券の発券方法など旅行代理店さながらの資料を作成し隊員へ向けて説明を行った。その際の航空券手配は、困難を極めた。それは、地震の影響で新幹線も高速道路も不通となり、東京と東北地方を結ぶ交通手段は空路しかなかったため、どの便もほぼ満席状態が続き、さらに出発直前まで、隊の人員が確定しないため、私は空席状況を確認するため常にパソコンの前に張り付いている状況であった。そのため手配ミスがないか、常に不安であったが、最終的に延べ107名全員が、無事に現地に行くことができたので安堵した。

通常の総務課業務と並行して、救援隊の後方支援を行うことは多忙を極めたが、その中、全学部の学生ボランティア100名以上が後方支援に参加したことは、大きな支えとなった。私たち職員や学生は、現地の救援隊と同じ気持ちであり、昭和大学として学生・職員がひとつになれたように感じた。このことは医系総合大学にしかできないことであると身を持って実感し、同時に昭和大学に入職してよかったと心からそう感じた。

東日本大震災学生後方支援活動報告書

医学部5年

奥茂 敬恭

・発足の経緯

2011年3月11日に発生した東日本大震災の支援活動として、学生にもできることを見つけ、救援活動をサポートしたいという思いで3月18日に発足した。全学部より参加者を募り、計137名による学生後方支援組織となった(表1)。

・活動内容

活動初期は電話対応・情報収集・募金活動・物資調達の4部門に分かれた。以下、各部門の詳細を報告する。

電話対応部門

3月20日より薬学部6年塚本絵美の指揮の下に早速活動を始め、9時・13時・16時・18時の4回に亘って、現地に赴いた医療救援隊との電話連絡を行った。また、対策本部における定例会議に提出する報告書・対策本部の会議録などの各種資料を作成した。電話部門に配属された学生は、自ら活動のタイムテーブルを作成し、1日5～6名で活動を行った。3月23日より現地の定時報告が9時・13時・17時の3回になり、新学期の始まる4月3日までは、第2陣・3陣・4陣・5陣の定時報告・定例会議の資料作成を続け、始業後は現地との電話対応を総務課に委託し、17時に行われる対策本部の会議出席と議事録作成を行った。

情報部門

救援隊が派遣された岩手県山田町は、地震発生後しばらくライフラインが復旧されず、拠点とした岩手県立山田病院では、3月31日まで水・電気・ガ

東日本大震災における昭和大学医療救援活動の記録

表 1 学生後方支援参加希望者一覧 (活動者 137 名)

(太字はリーダー)

情報収集	情報管理	活動記録	募金	電話担当	総括	物資調達
M6 山本大輔 M5 伊藤靖浩 M5 小田原圭 M5 野原哲人 M5 山川智之 M4 辻マリコ M4 戸田 匠 M4 新井良子 M3 乃 美証 M3 中村圭佑 M2 吉田知弘 P2 岩井彩里 P4 池田美彩 P4 高橋典子 P3 永尾美智瑠 P3 寺本美咲 P3 小林万里子 P2 狩野涼太 PT3 篠原里沙 M5 野村康介 M5 山崎達哉 M3 小室浩康	M4 杉山洗裕 M5 林 智樹 M3 安本太郎 P6 稲垣愛美 P3 日下部直子 P3 高松千紘 NR4 山内絵美	M5 若林 毅 M6 斎藤 丈 M5 角尾智絵 M5 石川春香 M5 半田亞希 M3 成島唯人 P6 西村有美子 P6 森 美樹 P5 後藤拓也 P4 穂積智美 P4 横田秀一 P4 渡邊顕義 P4 高木麻帆 P4 田川綾香	M4 石田幸子 MP1 中田亜希子 M5 宮本侑達 M4 岩谷綾香 M4 柴原みほ D3 石川莉里子 D3 鬼丸美菜子 D3 村上慧莉 D3 中神慧子 D2 片桐小百合 P6 大橋啓子 P6 川上真由美 P6 早船美帆 P6 福田萌美 P6 吉田千穂 P6 衛藤邦子 P6 富田佳央理 P6 辻山千春 P4 齋藤 栄 P3 鈴木弓絵 P3 倉岡 愛 P3 堀田久美 P2 上島実佳子 NS4 吉田千春 NS4 大泉佳菜 NS4 鈴木祥子 NS4 園田紗弓 NS2 小豆畑文香 NS2 川上理沙 NS2 山田麻衣子 PT3 横田秀一 OT3 宮本佳奈 OT2 上木麻衣子 OT2 山上真依 OT2 福崎彩奈 OT2 浅井翔伍 OT2 松永徳子 看専3 竹井俊晴	P6 塚本絵美 M6 小口達敬 M6 山本大輔 M6 斉藤 丈 M3 源川 結 M3 田中亜紗美 M5 山内日香里 M5 後明晃由美 D6 伴場紀子 D4 橋本アメリ D3 柴田恵理菜 P6 大橋啓子 P6 日向野理輝 P6 川上真由実 P6 早船美香 P6 松本このみ P6 速水直子 P6 確井志保 P6 有賀三希子	M5 奥茂敬恭 M5 長島周平 M5 長谷川宏子 M5 山本真貴子 M5 斉藤和彦 M5 飯島健太 P6 大橋啓子 P6 塚本絵美 P6 日向野理輝 P6 川上真由実 P6 早船美香 P6 松本このみ P6 速水直子 P6 確井志保 P6 有賀三希子	M5 中村弘毅 M5 野村康介 M4 百々悠介

スのいずれも復旧しなかった。外部から情報を得る手段も同時に失うため、救援隊に少しでも山田町の情報を提供できるようにと、医学部4年杉山洗裕が代表となり情報収集部門を立ち上げた。山田町周辺の復興状況、営業を再開した銭湯の住所と営業時間、翌日の山田町の天気、ライフラインはどこまで復旧したか等、収集した情報は電話対応部門を介して現地に伝達された。また、3月22日に活動参加者による全体ミーティングを行ったが、その後も後方支援の話聞いて参加したいとの連絡が多数寄せられ、その学生の活動部門希望調査・振り分けを行った。さらに、大学HPに医療救援隊の活動記録を掲載するため、電話対応部門の作成した定時連絡報告書・対策本部会議録を基に記録を作成した。

募金部門

医療救援隊の後方支援という点ではいささか目的を異とするが、被災地の復興には義捐金も必要であり、大学として義捐金を募る意識を高めたいという思いで、医学部4年石田幸子の指揮により活動が始まった。始業後の各学部オリエンテーション後・4月1日昭和大学病院入職式・8日入学式・10日大井町駅前、五反田駅前・11日旗の台駅前・5月7、8日横浜駅前など学内に止まらず、幅広い活動を行うことができた。855人の方から募金を頂き、集まった義捐金は504,491円、昭和大学を通じて日本赤十字社に送られた。

物資調達部門

医療救援隊が必要としている物資があれば電話部

門や大学総務課からの指示を受けて、東京で物資を調達し、現地に輸送する車に載せる作業を行った。初期は医療救援隊にも不足物資が多く活躍の場が多々あったが、次第に物資も充足していき、活動は縮小していった。しかし、救援活動には必要十分な物資を備えていることが条件であり、この部門は救援初期に必要な不可欠の存在として役割を果たしたと考えている。

その他

後方支援活動では医療救援隊のサポートを行っていたが、現地の様子を知り、どのようなサポートが必要なのかを考えることは大切である。現地に行かれた救援隊の方にお話を伺う機会を設け、山田町の実際を知ることができた。ご協力いただいた第1陣森田先生、光本さん、第2陣の松岡先生、外山さん、第3陣の上條先生、黒岩さんには感謝申し上げます。

謝辞 最後に、学生後方支援活動に御指導、御協力を頂いた上條先生、的場先生、総務課の職員の皆様方に深く感謝申し上げます。

災害時における医療救援者のメンタルヘルス

医学部精神医学

平島奈津子

保健医療学研究科

上條 由美、的場 巨亮

薬学部教育推進センター

木内 祐二

はじめに

平成23年3月11日の東日本大震災発生直後から昭和大学医療救援隊の活動が開始されたが、その過程で帰京後に複数の隊員が心身の不調を感じていることがわかり、惨事ストレスの影響が疑われた。そこで、第6陣から「救援者のメンタルヘルス」に関する事前研修が実施され、既に救援活動を終えた隊員に対してはe-mailにて「心身の不調の多くは一過性であるが、相談に応ずるサポート体制があること」を知らせた。

全活動終了後、救援者のメンタルヘルスに関する記録を残し、今後活かすために調査を実施したの

で、その結果の一部を報告する。

調査の対象と方法

東日本大震災の救援活動にあたった昭和大学医療救援隊の全隊員105名(学生7名を含む)に対して、郵送にて、今回の調査の趣旨を説明した上で自由意思による無記名自記式調査への参加協力を呼びかけた。調査では、救援後の心身の状態、救援活動時に体験したストレス状などを尋ねた。また、CES-D抑うつ自己評価尺度(以下CES-D)¹⁾と改訂出来事インパクト尺度(以下IES-R)²⁾により、救援後のメンタルヘルスの評価を行った。CES-Dは直近1週間の抑うつ症状の出現日数で評価するもので、16点以上あると抑うつ状態やうつ病が疑われる。IES-Rはトラウマ関連症状を評価するもので、25点以上あると外傷後ストレス障害(PTSD)に罹患している可能性が高い。

なお、集計後、再び、全隊員に向けたe-mailにて「心身の不調の多くは一過性であるが、相談に応ずるサポート体制があること」を知らせた。

結果と考察

アンケートの回収率は64.8%(68名)で、記載された期間は平成23年4月28日～5月20日だった。集計した結果、救援後に何らかの身体症状が35.3%(24名)に認められ、飲酒量や喫煙量の増加は各々2.9%(2名)に認められた。CES-Dの平均得点は9.9±6.2(範囲0～33)で、16点以上のハイリスク者は5.9%(4名)で、いずれも20代だった。IES-Rの平均得点は5.9±8.8(範囲0～53)で、25点以上のハイリスク者は4.4%(3名:20代2名、30代1名)だった。7.4%(5名:そのうち1名が学生)がCES-D、IES-Rいずれかでハイリスク者だった。20～30代の若い世代にハイリスク者が認められた今回の結果は、先行研究結果と一致しており³⁾、この世代への事前研修やフォローアップが今後の課題と考えられた。

救援活動中に体験したストレス状況については、全陣で「悲惨な光景や状況に遭遇した」が最多だった。なお、IES-Rハイリスク者は全員「自分の家族を連想してしまうことがあった」、「十分な活動ができなかった」と回答していた。

救援活動についての感想では、「やりがいのある

活動だった」, 「医療におけるチームワークの重要性を感じた」が最多だった。少数ながら, 「活動後に通常の勤務や仲間に以前のように溶け込めない違和感に悩んでいる」という回答がみられた。

おわりに

余震が続く被災地での救援活動は, 救援者自身が心的外傷を受ける危険性があるだけでなく, 心的外傷を負った被災者に共感的に関わることによって被災者と同様のストレス反応(二次受傷)³⁾が生じてしまうこともある。特に, 経験の浅い20~30代の救援者はこれらのリスクが高いので, 事前の研修や配慮が必要であると考えられた。

参考文献

- 1) Radloff, L.S. (1977): The CES-D scale: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement* 1 : 385-401.
- 2) Asukai N, Kato H, Kawamura N, et al.: Reliability and validity of the Japanese-language version of the impact of event scale-revised (IES-R-J): Four studies of different traumatic events. *J Nerv Ment Disease* 190 : 175-182, 2002.
- 3) 大澤智子: 二次受傷—臨床家の二次的外傷性ストレスとその影響. *大阪大学教育学年報* 7 : 143-153, 2002.

昭和大学医療救援隊に参加して

戸田建設(株)東京支店営業部
堀 順一

このたびの東日本大震災により被災された皆様に謹んでお見舞い申し上げます。

3月11日, 体験したことのない大地震が東日本を襲い, 東京はパニックに陥りました。徒歩で帰宅する人や, 駅の構内で一夜を過ごす人, 生まれて初めて見る光景でした。それから4日後, 私は昭和大学医療救援隊の1陣に同行させていただきました。

主な活動として車輛のスケジュール調整, 医師の送迎, 物資の運搬などです。救援隊の方々のお役にたつことが出来たかは分かりませんが, 大きな問題も起きず, また事故も無く終えられたことに安心しました。建設会社の社員が医療救援隊に同行するこ

とはめったに無いことだと思います。医療の場への立ち会いも経験することは出来ません。このような体験は, 普段の生活とは違う緊張感でした。

一緒に同行した救援隊のメンバーは体育会系の方が多く, 勢いがある自分の性格にピッタリでした。日に日に強くなっていく姿, 患者さんから頼られている姿を拝見し, 医療の素晴らしさも実感いたしました。皆様方にはいつも気を使っていたいただき, 「昭和のチームだから, 一緒に頑張ろう」と言っていただいたことも忘れられません。可愛がっていただき, 本当にありがとうございました。

今回の活動にご尽力いただいた学校関係者の皆様方, 背中を押してくれた会社に感謝申し上げます。

昭和大学医療救援隊感想文

戸田建設(株)東京支店営業部
橋本 博行

私は昭和大学様の医療救援隊2班に同行し, 3月19日から22日までの4日間被災地の岩手県に行かせて頂きました。

私の主な業務内容は盛岡市内まで運び込まれた救援物資を医療救援隊がいる山田町まで運ぶ事です。現地では被災者の方と触れ合う事がなく, ホテルでの待機, 盛岡市内での買い出しといった状態でしたので, 現地の悲惨な状況を見ても現実に起こっている事と感じられませんでした。何かテレビを見ている様な状態だった事を覚えております。

また医療救援隊を見て感じたのは, 行きと帰りでは全く別人の集団に見えた事です。説明しますと, 行きの時はみなさん緊張した面持ちで, バスの中では携帯を見たり, 寝ていたりそれぞれの時間を過ごしていましたが, 帰りのバスでは会話と笑いが絶えない状態でした。一緒に生活することで仲が深まる事は当たり前ですが, 大変な状況で一緒に生活することで人はここまで仲が深まるのかと感じました。皆さんが少し羨ましかったです。

最後にガソリンが無い, 携帯が繋がらない, 何が起こるか分からない状況の中で生活することは非常に疲れました。医療救援隊の派遣中に事故が無かった事が何より良かったと感じております。有難うございました。